

しろその影がうすくなったように思われる。今後はもっと重視されて然るべきであろう。

それはとも角として作物が製造機械であるとするれば、施肥・管理等の技術はその機械のもつ能力を最高度に発揮させるための役割を果すものであり、特に環境条件によって左右され易い農業生産の場合重要な技術ではあるが、機械自体（品種）のもつ能力の限界を突破させうるものではない。

その点植物生育調節剤の果す役割はどういうものなのだろうか。最近倒伏防止剤や摘果剤等に有望なものが出てきた由で御同慶の至りではあるが、これらはいずれも作物本来の生育・生

長といった面から見れば、むしろそれを抑止する方向に働くものばかりのようである。そうではなくて例えば同化能力をもつと高めるとか、目的とする部位に対して同化生産物の配分率を高めるとかいう方向へ働く物質を期待するのは無理なのだろうか。あったとしてもそれはやはり品種本来のもつ能力の限界迄のものなのだろうか。もしその限界を突破させることが出来るならば、先に述べた工業生産の場合の機械の改良の役割を果すものが育種以外にもう一つふえることになり、本当に嬉しいことなのだが、それは痴人の初夢に過ぎないものなのだろうか。

年 頭 の 辞

農薬工業会会長 西 圭 一

華々しい幕明けであった70年代でしたが、農薬業界にとりましては農薬残留など毒性問題が茶の間の話題にまで滲透し、60年代にはみられなかった異なった様相がみられ、われわれの意図する方向とは余りにもかけ離れた形態で、次々に農薬の使用規制が波及、波乱の多い1年でした。これらの事態を分析、反省してみますと、これだけ情報化時代といわれている中で、農薬に対しては正しい理解がなく、認識の不足がもたらした非科学的というよりむしろ投げやりの、逃避的現象が一部の関係者にみられたことは、残念ながら文明社会における奇妙な現象の一つとしか申し上げるほかありません。

また、科学や技術の進歩は、誠に喜ばしいことではありますが、ことの本质も弁えません、軽薄な態度で小間切切的に、ある一点を興味本位に取り上げ、つなぎ合わせの研究は一時的にはもてはやされても、所詮は底の浅いものと、

その評価は自づから定っていると思っておりますが 最近、兎もすると長年に亘り地味に築き上げた研究基盤をマスコミの力を借りて、結果的には、叩き潰そうとするような研究や発表の方法が一部にみられることは遺憾に堪えません。農薬残留毒性も放任していたら許されないことですが、1日を競って物事を糊塗するような拙速主義を排し、人間一生涯の健康を確保する観点からすれば、むしろ着実に一步一步を築き上げる努力のほうが大切ではないでしょうか。

一年の計は……と申しますが、この機会に先ずは自からも反省し、農薬に関し業界として基本的データの集積を図り、PRを積極的に行ない、かつ71年を乗り越えるべく最大の努力をするとともに、歴史のひとコマとしてみられたとき、農薬残留毒性や環境保全の対策が、悔を千歳に残さないようにするため、関係者のご理解とご協力をお願い申し上げます。